

彼等流浪す

小川未明

青空文庫

あてもなくさ迷い歩くというが、やはり、真実を求めているのだ。また美を求めているのだ。なぜなれば、人間は、この憧憬がなければ、生きていられないからだ。

あわれなる流浪者よ、いつたい、どこに、その真実が見出され、美が見出されるというのか？　そして、いつになったら、なんじ汝の流浪の旅は終るといふのか？

人間が、この地上に現われた時より、同じく、憧憬は、生れた。南から北へ、北から南へと、彼等は、相呼びかわしながら、はて知られぬ旅へと上った。何ものを求めるのか、彼等みず自からにさえ分らないことであつたらう。しかし、これを押しつめて言えば、

眞実を求めたのだ。もつと美しいものを求めたのだ。

クロポトキンは、いう。

「人の心の中に、何かしらないものが住んでいる。そして、たえず、あらゆる人間に何をか訴へている。それは、即ち愛である」と。

幾千年の過去に於てそうであつた。恐らくまた、永久の未来に於て、變りのないことであろう。

思うに、我等の芸術は、そこから生れた。又、我等の社会運動は、そこから生れたのである。そこには、幾何、流浪の旅に上つた芸術家があつたか知れない。そこには同志を求めて、追われ、迫害されて、尚お、眞実に殉じた戦士があつたか知れない。

彼等は、この憧憬と情熱とのみが、芸術に於て、運動に於て、同じく現実に虐げられ、苦しみつゝある人間を救い得ると信じていた。こゝに、彼等のロマンチズムがある。

しかし、曾て、どこにも、正義の国というものは見出されなかった。正義のみの村落、もしくは、美のみの郷土というものは、探し出されなかった。たとえば、人間に共通した真理はある。理想はある。感情はある。けれど、そのみの世界というものは、現実に於てあり得ない。大衆といい、民衆といい、抽象的に、いかように人間を考えらるゝことはあつても、実際に於ける、大衆の生活、民衆の生活は、全く個別的のものであつた。

どこに行つても、人間は、みな自分と同じように、たえず、何

ものかを求めている。そして、苦しんでいる。環境と戦っている。そして、人間生活の真相は、その個々のものについて、深く認識されるより他には、分る筈がなかったのである。

それが、また、正しいのであつた。流浪者が失意に泣くのは、深く人間を悟つた時である。人間はみないろ／＼の形に於て、悩み苦しみ求めている。それは、曾て、抽象的に考えられたような、真実や、美は、そのまゝ何処にも存在するものでないと知つたがためである。

流浪者程、自然をいつくしむものがないと、クロポトキンは言っている。なぜなら、自然のみが、どこに行つても、莞爾かんじとして、遊子ふところを懐あざむにいられて欺かないからだ。しかし、変らないというばかり

りでは、このことは説明されない。一脈故郷の空や、原野と、ながめの相通ずるものがあるがためである。

初期のロマンチストを目して、笑うことはできぬ。英国の山川詩人が、故郷の自然を愛したのは、清純な魂によつてである。スコットランドの素朴な風景や、居酒屋に集る人々等は、バーンズによつて、永久に芸術に生かされている。

北方派の画家等にして、南欧の明るい風光に、一たび浴さんとし
しないものはない。彼等は、フランス 仏蘭西に行き、イタリー 伊太利に行くを常とした。しかし、そこはまた、彼等にとつて、永住の地でなかつたのである。伊太利の空を描いても、知らず北欧の空の色が、描き出されるのをいかんともすることができなかつた。ゴッホに、到

底セザンヌの輕快洒脱を望むことはできないが、その表現主義的であり、哲學的である点に於て、ゴッホとムンクと相通ずるところがあるのは、同じ、北方の産であつたゝめであろう。

私達は、さらに、漂浪の詩人に、郷土のなつかしまれたのを知る。レエルモントフのコウカサスに於ける、薄倖の革命詩人、レヴィートフの中央ロシヤの平原に於けるそれであつた。

彼等は、この広い天地に、曾て、自分を虐遇したとはいえ、少年時代を其処に送つた郷土程、懐かしいものを漂浪の間に見出さなかつた事である。少年時代とその周囲即ち自然にも、人間にも特別のものがなくてはならぬ。こゝに童話文學の發生がある所以だ。この殆んど神秘的な説明し難い感情こそ、土と人との連結で

もあるのだ。

どこの村落にせよ、まだ、あまり都会的害毒に侵されざるかぎり、また、彼等が土を耕している人間であるかぎり、自然発生的に、その村に結ばれた習慣があり、掟がある。そして、他郷に見られない、自からの扶助が行われている筈である。かゝる村落自治こそ、思い出しても、なつかしいものであつたにちがいない。

流浪漂泊の詩人が、郷土に対して、愛着を感じたのは、たゞ自然ばかりでなく、また人間に於てゞもある。眞実を求めて、美を求めて、はてしない旅に上つた彼等は、二たびそれを最も近い故郷に見出したのだ。

「無産階級に祖国なし」げに、資本主義の波に蕩とうよう揺されつゝ工

場から工場へ、時に、海を越えて、何処と住居を定めぬ人々と
つては、一坪の菜園すら持たないのである。けれど、彼等は、そ
れを、真に不幸とは思わないだろうか？

人間は、到底、理知のみで生きることにはできない。心の満足を
必要とする。それが得られないために、僅かに憧憬によつて、悲
惨な生活にも堪え得るのだ。

漂浪者の多くは、曾て郷土に反抗した人達であつた。しかして、
流浪の末に、最後に心の慰安を多くそこに見出したと知る時、私
達は、土と人間の關係について今更の如く考えさせられるのであ
る。

青空文庫情報

底本：「芸術は生動す」国文社

1982（昭和57）年3月30日初版第1刷発行

底本の親本：「常に自然は語る」日本童話協会出版部

1930（昭和5）年12月20日初版

入力：Nana ohbe

校正：仙酔あびす

2011年11月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

彼等流浪す

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>